

東大研究所
国際会議
が

「希望」が導く社会探る

国際会議「希望と社会の新たな地平
へ」―東京・六本木の国際文化会館



釜石の調査事例も紹介

人間関係の重要さ訴え

希望と社会との関係を龍の小説「希望の国のエンクソラス」を紹介した東大の玄田有史教授。釜石市での調査を踏まえ「個人が希望を持つには、豊かさや人間関係が必要。さらに、挫折を乗り越えた経験があると希望を持ちやすい」と新たな見解を加えた。

米デューク大のアン・アリソン教授は日本で起きた少年事件を例に引きながら「安定の源泉としての自分の居場所と自分らしさがなくなっている。自分と社会との関係が揺らいでいる」と指摘し、「と中学生が語る村上」

「希望は、戦争。」(論座)二〇〇七年一月号)というサブタイトルの論文を三十一歳のフリータ―男性が書き、福田康夫首相は「希望と安心の国」づくりを目標として掲げた。米国では黒人初の大統領を目指すバラク・オバマ氏が著書のタイトルに「希望」という言葉を使っている(邦題「合衆国再生 大いなる希望を抱いて」)。希望は個人レベルにとどまらず、社会レベルの問題でもある。

「政治が大衆を動員するには希望を打ち出さなといけない」と述べたのはシドニー大のガッサン・ヒュージ教授。移民の歴史を持つオーストラリアでの人種差別的な事件を紹介し「自分の思い通りにならない他者といかに向き合い、交渉できるか、ということが課題だ」と語った。

東大の広渡清吾教授は「かつてドイツではヒトラーの第三帝国が希望だった。希望の中身は、良いものも悪いものもある。希望というカテゴリーなしに、この社会を分析できない」と希望学を研究する意義を強調した。